

二月総評

立花 開

口下手で梅のしたまで来てしまう 松下 誠一 東京都
未熟な恋の苦さ。会話は弾まず、行きたい場所も決まっていなまま足だけが進んだ先が、梅の花の下だった。黙っても（先ほどよりは）許される空間にたどり着けた。「口下手」ゆえの沈黙の行き止まりに梅が咲き乱れているような、沈黙の時間を養分に咲いたような美しい梅を見上げる二人。

キミがあの子に向けた笑顔ごと

コンタクトの洗浄液に沈める

万年秋 東京都

見たくないものほど脳裏に焼き付いて、消すことができない。主体が密かに恋焦がれる「キミ」がたった一人だけに向ける笑顔が、もうコンタクトに張り付いてしまった。沈めているのは嫉妬に狂う心なのか、自身には決して向けてくれない笑顔を持つ「キミ」への苛立ちか、「あの子」への羨望か、もう二度と浮かび上がることがないように沈めていく。

演劇は嘘をついてる

嘘をつくことに慣れたら

そこが崖だよ

香取小春 宮崎県

サスペンスで崖に追い詰められた犯人の姿という、誰もが一度は見たことのあるシーン。生きるのは、何かを演じるための舞台の上のようにも思う。誰もが何かの嘘をついているのに、いつの間にかそれを白日の下に晒すための流れが出来上がり、あらがえず崖まで来てしまった：そんな舞台もあるのかもしれない。誰もが崖に立つ可能性を秘めている。

キリンでも飼うつもりなの三月を

こんな明るい吹き抜けにして

常田 瑛子 山口県

美しい作品だ。三月を建物に、しかも「キリン」が飼えるほどの高い吹き抜けに見立てる。採光の度合いが見えてくるようだ。建物の姿の説明ではない描写で表現を試みている面白さ。また、それらはすべて架空の存在であることに、言葉と空想の無限の広がりを感じる。

花冷の糸に重たいティーバッグ

ムクロジ 群馬県

「花冷の糸」という観念世界の糸と、ティーバッグにつながる糸。私たちがこの世で見ているものは、どこまでがこの世の物なのか。お湯から引き上げ切ったときの脱力した生き物のような形や重さは、我々が生きる世でたまたま紅茶としているだけなのかもしれない。

つかまり立ちの春ふくらまず

ように吹く

植田 遥希 神奈川県

赤ん坊がいる場所特有の、湿度があり柔らかい空間の気配がこの作品には感じられる。「つかまり立ちの春」、「春ふくらまず」という春が動く描写が重なっており、生命のエネルギーが見えてくるようだ。無垢な小さな手が春そのものでありながら、春のかけらを掴む。

唇を触っても春来ないしね

松浦やも 東京都

自分の唇も、あなたの唇も、ただの唇。春へ移り変わるスイッチではないはずなのに、何かを信じて何度も触れてしまう。「春が来ないね」という呼びかけと、「春来ない、死ね」という罵倒の二重の意味を持つ言葉が重なり合う。乾いた唇をいつまでも弄る。

魔法瓶くちびるで散る牡丹雪

波津 ゆみ 神奈川県

我々の体は、命の温度を保つための魔法瓶の器である。生きるというのは熱く、しかし自然な私たちでその熱さを保つのは難しい。温度がむき出しの場所の一つは唇である。そこに触れることで「牡丹雪」は溶けて消える。「くちびるで散る」という抗えない運命のよな言葉の力に惹かれた。

泣いたあと頬はすすしいさみどり

池田 彩乃 青森県

涙で濡れたとき、皮膚の表面の温度が下がる。長く、そしてたくさん涙を流さないと、そのような体感を得られない。大泣きしたあとの心のさっぱりとした感じと、温度に色を感じる、色が宿る温度を頬に持っている、という自覚。

君は海の顔をしていない

それがどんなに嬉しくて

それがどんなに悲しいか

翅綿 秋田県

「海の顔」という、一見何を指すのか全くわからないもの。けれど、海の顔を持つ人にはわかるのだ。知らないとは、幸せであり、苦しみであり、生きやすさであり、哀れさである。けれど、知る前には二度と戻れないから、海の顔を持たない人をどうしても苦く見つめてしまう。